

# Fuji Learning Information No. 9

2017年1月15日

旭川藤女子高等学校

本校で70分授業がはじまって、間もなく3年が経とうとしています。50分が当たり前であった授業を70分で展開してゆくことになった負担や、教員が主体で教えていた授業を「自ら学ぶ」授業へと作り変える苦労は、並大抵なものではなかったと思います。しかし、時代は間違いなく私たちが藤の学び改革で進めてきた方向にあり、教師が一方向的に教えるという授業のあり方は終わりを告げることは間違いありません。

今回は本校の教員が70分授業をどのように捉えているのか、調査を行った結果の一部をお伝えします。調査は、本校で授業を担当している専任の教員28名全員を対象に2016年10月に実施したものです。

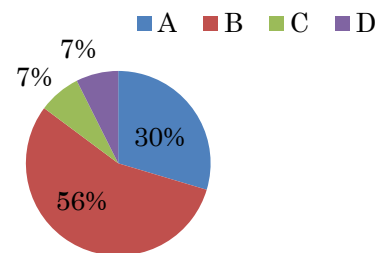
## 「70分授業調査」より

① は「学習者が主体的の学ぶ授業づくり」ほどの程度達成されていますか？という質問です。A、B合わせて86%の授業者が大部分の授業で学習者が主体の授業づくりが進んでいると答えています。このことから、学習者主体の授業づくりは概ね定着したとみています。

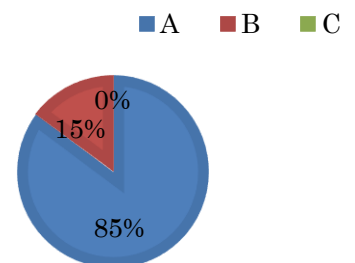
- 【凡例】 A (すべての授業で定着)  
 B (半分以上の授業で定着)  
 C (半分以下の授業で達成)  
 D (ほとんどの授業で定着していない)

これに関連して、②は、「70分授業になり授業者が説明する(教える)時間はどうなりましたか」という質問をしました。85%の授業者は「A(短くなった)」と答えています。「B(変わらない)」は15%、「C(長くなった)」はさすがにいませんでした。授業時間の変更とともに、授業スタイルを変更することで、授業者が一方向的に教えるという授業は大きく変化したことがわかります。本校では、時間短縮のための工夫としてパワーポイントやiPadを使用した説明を推進し、さらに生徒同士で考えて解決を促す相互学習の取り組みや、独自学習を重視することで、学習者が主体的、能動的になる授業への移行が進みました。

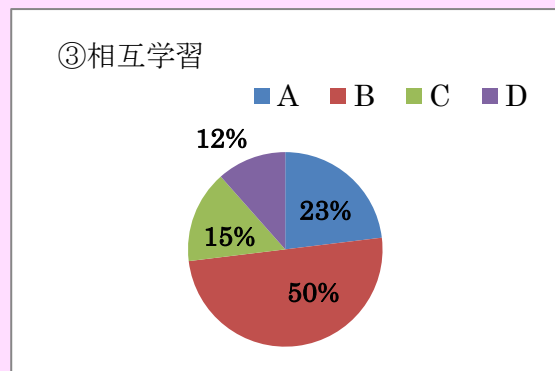
① 学習者主体の授業づくり



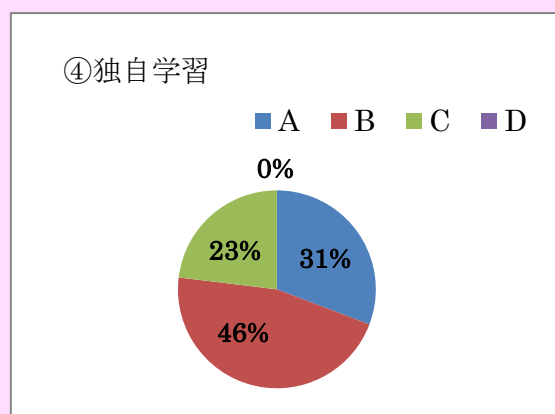
②説明の時間(教える)



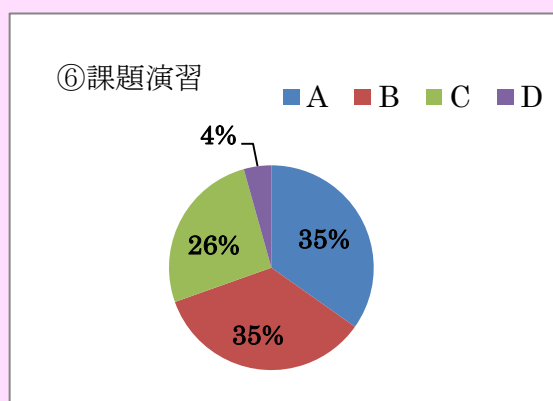
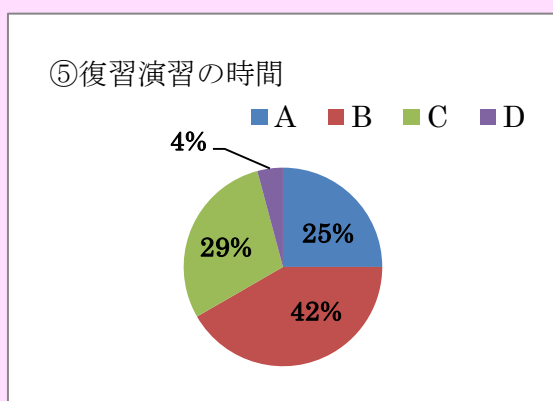
③は、70分授業で重視をしている「相互学習をどのくらい導入していますか」という質問です（凡例は①と同じ）。A、B合わせて73%に達しており、多くの授業の中で相互学習が取り入れられていると捉えることができます。また、相互学習の必要性が認識されてきたとみることもできます。ただし、C、D合計で27%の授業者は達成状況が半分以下であり、授業者の一方通行の授業時代にはあまりなかったグループワークやペアワークなどに慣れていなかったり、その効果を疑問視している授業者が、まだ一定層いることに注目しておかなければなりません。



④は、相互学習とともに重視している「独自学習をどのくらい導入していますか」という質問です（凡例は①と同じ）。A、B合計で77%に達しており、Cが23%、Dを選択した授業者はいませんでした。一般的に独自学習は相互学習に比べ形としては導入しやすいと思われます。これらから、多くの授業の中での独自学習が定着したと考えている。また、独自学習の必要性が認識されてきたとみてよいと考えています。



⑤は「復習演習の導入状況」、⑥は「課題演習の導入状況」についての質問です。両方の質問ともA、Bの合計が70%程度に達しており、演習の時間が70分授業の中で定着してきたと考えられます。また、演習の必要性が認識されてきたとみることもできます。



以上のように、藤の学び改革による70分授業は、形としての定着は或る程度進んだとみることができます。しかし、これからの課題は、その質や精度をどこまで高められるかにかかっていると考えています。これまでも述べてきましたが、主体的、能動的な授業の先には、個々の学力差や進度へどう対応できるかという課題があります。「できる生徒を待たせない」で、「学習者の脳をアクティブな状態」であり続ける学習形態を更に追及してゆかなければなりません。2020年度から始まる新しい学習指導要領でもポイントとなっている「アクティブラーニング」の一つの課題は、学力の定着といわれています。その課題を藤の学び改革は解決する方法になると考えています。